

鳥沼 憂

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七%が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残るXXXX年の東京。A.C.I.D.（対天災国際防衛省）に所属する十

七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」

を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天

災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。

七月のある日、梅雨期の戦いで傘を壊してしまった快

晴は、神宮寺から「雨宿りの村」と呼ばれる隠れ里に住

む傘職人の元で、新しい傘を作ることを提案される。そ

の村には「天ノ巫女」の伝承が遺されていると聞いた照、

そして二人のお目付け役を任された風沙も、「雨宿りの村」

への遠征に同行することとなったのだった。

【主な登場人物】

天海快晴……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織

「A.C.I.D.」の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹

の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》に

より左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照……快晴の妹。黒髪のサイドテールで、常にレ

インコート等の雨具に身を包んでいる。《第二次世界大天

災》で被災した後遺症が遺っており、基本的にA.C.I.D.

東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。「天ノ

巫女」と呼ばれる、雲を晴らすことができる能力を持つ。

神宮寺陸斗……天海快晴ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。金髪を後ろで束ね、

青縁の眼鏡をかけている。東京支部全体の副隊長でもある。天海兄妹とは古くからの付き合い。

日暮風沙……東京支部の新人調停士兼整備士。ピンク

の髪をツインテールにしている。機械いじりとかわいいものが好き。快晴に密かに（？）恋心を抱いている。

* * *

近年の七月にしては珍しく、雲ひとつない青空が広がる清々しい朝。そんな日に似つかわしくないレインコートを着た少年少女が三人と、軍服姿の男性が一人、一台の自動車に乗り合わせていた。

「本当なら、飛行機でも使えれば楽だったんですけどね。立地の問題もありますし、それに——万が一にも、外部に情報が漏れるようなことがあるといけないので」

長い金髪を後ろで束ねた、眼鏡の男性がハンドルを指でつつきながら言う。助手席に座っていた、眼帯をした少年がそれに答える。

「気象病のこともあるし、照にとつてもこれが最善だろう」

少年はフロントミラーに映る後部座席の少女——二人のうち、長い黒髪を一つ結びに垂らした、どこか虚ろな目の少女のほう——を見ながら言った。

「それより、わざわざ着いてきてくれて良かったのか。

神宮寺も暇じゃないだろうに」

「まあ、さすがに未成年だけで行かせるのも気が引けますからね。これくらいはさせてもらいます」

とはいえ私も保険みたいなものですが、と軍服の男、

神宮寺陸斗は自虐気味に呟く。

いくら目的地が一般には秘匿されている隠れ里であるとはいえ、その詳細な住所さえ分かれば、AIによる自動運転で人間の操作を介することなく辿り着くことができる。もちろん自動運転とはいえ運転免許を持った人間が運転席に乗ることは必須だが、ほぼほぼ必要のない労力であることは確かだ。

吹きすさぶ嵐の中で運転するような時はさすがに人の手でないとは危険だが、今回は任務での出勤ではないため、運の悪い事故さえ起こらなければ道中に危険はない。そのため、神宮寺はハンドルこそ握れる位置にいるものの、ほとんど手は離れたまま、同乗者の少年らと気さくに会話をしていた。

「関西地方まで……というか、私は東京から出たこともなかったから、旅行みたいでちよつと楽しみかも」

そう顔を綻ばせたのは、後部座席に座るもう一人の少女、日暮風沙。桃色の髪をツインテールに結び、レイン

コートの下にはピンクのパーカーとデニムのショートパンツを着た、軽装の小柄な少女である。

「風沙さんですか？ 実は私もなんです。……なんて、神宮寺さんには怒られてしまいそうですけれど」

風沙の隣の少女、天海照あまみてるも同調して微笑む。その様子をフロントミラー越しに見て、神宮寺は安心したように目尻を緩めた。

「いえ、むしろ良かったです。『天ノ巫女』の伝承について確かめに行く、なんて言った手前、照さんがプレッシャーでも感じていたら申し訳ないなと思っていたので。小旅行とでも思って——というのは言い過ぎですが、軽く羽根を伸ばしてもらえたら幸いです」

それを聞いた照も、よかった、と笑みを零す。その会話を聞いていた眼帯の少年……照の兄、天海快晴あまみかいせいが、俯きながら呟く。

『天ノ巫女』の、伝承——」

その意味を深く考え込むかのように、天海は目を閉じて黙りこくってしまった。後方から風沙が何うような視線を向ける。

人をも融かす雨を降らす「災雲さいうん」と、それに伴って現

れる異形の怪物「天魔てんま」。それらを退け、人々を雨害うがいから

守る組織が、彼らの所属する「A.C.I.D.アシッド」(対天災国際防

衛省)である。その「天魔」との戦いにおいて重要な役目を担うと考えられるのが、照の生まれ持った能力——

「天ノ巫女」であった。

「……今更なんですけど、『天ノ巫女』って具体的に、どういう存在なんですか？」

沈黙に耐えかねてか、おずおずと風沙が言った。口を動かす気配のない天海の代わりに、神宮寺が答える。

「私たちも詳しいことはよく分かってないんです。ただ、世界的にもほんの数例ですが、照さんと似た能力——念じることで一瞬のうちに雨雲を晴らし、天魔を退ける力——を持つた人間がいることは明らかになっています」

当然のことながら世界各地でもこうした人々の調査が進められているが、今のところ目ぼしい成果は出ていないのだという。

「でも、今から行く『雨宿りの村』……でしたっけ？ ここには『天ノ巫女』に関する伝承がある、って話でしたよね？」

矛盾を孕むような神宮寺の発言に、風沙は眉間に皺を寄せながら尋ねた。

「ええ。ですが、村の場所を秘匿しなければならぬこ

とと、双方の時間がなかなか取れなかったことがネックで、これまで十分な調査はできていなかったんです。加えて、照さんの気象病のこともあり、迂闊に照さんを動かせなかったのもあって」

気象病とは、低気圧の発生に伴って頭痛やめまいが起こる症状のことだが、照のそれは一般的なもののよりもかなり重篤だった。さらに彼女の場合、これから発生する低気圧に対しても症状が出てしまうため、予測や対策も困難という状況であった。

「そうか、今年「梅雨晴」があったからか」

急にむくりと顔を上げ呟いた天海に、神宮寺は頷く。「ええ。もちろん災害の発生は必ずしも天気図通りではありませんが、晴天予報の日は発生の確率が下がることは確かなので。運良く今年はしばらく晴れ間が続くようなのもあって、急遽約束を取り付けたんです」

ここ数年は梅雨明けが遅かったうえ、ここまで晴れがまとまった期間もなかったため、明確な「梅雨晴」の期間が存在しなかったのだ。

「丁度……という言い方も良くないが、梅雨の天魔退治で傘も壊れてしまったしな。タイミングは良かったのかもしれない」

「えっ、傘は私が整備したものが――」

「あー、あー、その、なんだ、せっかく名のある職人がいる村へ行けるんだから、気になるだろ。な、照」
「わ、私はそんなに……でも、遙か昔から傘を作り続ける職人……なんて、きつとすごい人なんだろうね」

唐突に話を振られた照は困惑しつつ返す。遠征の第二の目的に、梅雨間の天魔との戦いで折れてしまった天海の傘を、村に住むという傘職人の元で新調する、というものがあつた。なお、風沙が言うように壊れた天海の傘は彼女が「整備」して一応使える状態にはなっているのだが、その見た目に原型を留めない魔改造が施されたため、天海は今も必死に鞆ケイヌの中に押し込めている。

「そういえば、向こうでは京都支部の方に案内していただけって話でしたよね。どんな方なんでしょう」

興味津々といった様子で照が尋ねる。支部間での交流や異動がないわけではないが、新人の風沙はともかく、照や天海も京都支部の人間と出会うのは初めてだった。

「そうですね、私も会ったのは一度だけなのですが……なんというか、油断ならないというか、底が知れないというか……」

「……なんか急に不安になってきたわ」

ぼやく風沙に苦笑いを返しつつ、神宮寺は補足する。「接しづらいような方ではないので大丈夫ですよ。あら

ゆる意味で、相当手練た人ではありますてだれが」

意味ありげな神宮寺の言葉に、ますます不安を募らせる風沙であった。

* * *

それから何時間か経ち——運転手以外の人間は何度かうつらうつらとし、時間感覚があやふやになってきたころ。外の異変に気付いた風沙が、あつと声を上げた。

「これ、霧……？ いつの間に……」

その声に反応した天海がすぐさま覚醒し、車窓からの景色に息を呑んだ。

「これは……まさか」

ハッと後ろを振り返り、照の様子を確認する。しかし、彼女はすやすやと寝息をたて、心地よさそうに目を閉じたままだ。

「大丈夫です、天魔の仕業じゃありません。これは元々、村の付近に頻発する自然の濃霧です」

「何だ、そうだったのか」

天海は心底ホッとした様子のため息をつく。

「あ、でも、村の付近ってことは……つまり」

風沙がそう言い終わるとはほぼ同時に、車が停まったというより、何者かに止められた、と言ったほうが近い

だろうか。

「遠路はるばる、ご苦労さんでしたなあ」

霧の中から現れたのは、優美な着物姿の女性であった。一重で切れ長の目に、絹のように透き通った白い肌。さながら太古の浮世絵に描かれた日本人象を、現代風にリメイクし蘇らせたかのようなだった。

「ご無沙汰してます、京極きんごくさん」

車窓を開け、神宮寺が丁寧に頭を下げる。一方、京極と呼ばれた女性は口元に手を当て、上品に微笑む。

「京極さん、だなんて仰々しいわあ。キリカさん、でええのに」

そう冗談めかして笑った後、彼女はすぐに何事もなかったかのように真顔に戻り、

「残念やけど、ここからは村の領域になるさかい、神宮寺さんにはここで引き取り願います。堪忍やね」

「いえ、京極さんのお顔が見られただけでもよかったですよ。それでは、うちの天海たちをよろしく頼みます」

仰々しい、と言われた苗字呼びを貫く神宮寺に、もう、とキリカは頬を小さく膨らみます。「帰り道もくれぐれもお

気をつけやす。東の神宮寺さん」

「そちらこそ。西の京極さん」

そう互いに挨拶を交わすと、神宮寺は天海ら三人を車

から下ろし、霧の中を引き返していった。

「……まったく、相変わらず食えない人やわ」

そう呟いたキリカに、風沙は神宮寺が彼女についてほとんど同じことを言っていたのを重ね、不思議と納得がいくように感じた。

「改めて、ウチは京極霧花^{きよこぎりつか}。霧に花と書いてキリカ。皆さんも、キリカって呼んでくれてかまへんですからね」

霧花に連れられ、霧の立ち込める林をゆつくりと歩き出す一行。当然道に舗装はなく、細い獣道を霧花は草履のまま、すたすたと姿勢よく歩いていく。

「俺は天海快晴。東京支部の調停士だ」

「天海照と申します。快晴お兄ちゃんの妹で、調停士補佐をしています」

「日暮風沙です。今年正隊員になったばかりなんですけど……一応、調停士兼整備士^{メンテナンス}ってことになってます」

三人の自己紹介を聞きつつ、なるほど、と頷く霧花。

「あんさんが陸斗^{りくと}さんの言ってた、陸斗さんの一番弟子の子やね。で、そっちの子が噂の、東京支部の天ノ巫女」
彼女は足を止めて振り返り、天海と照を順番に指差した。兄妹はこくりと首を縦に振る。

「長旅でお疲れやろ。泊まる場所も用意しとるし、そこで一旦お茶でもいかががどすか。積もる話もお聞きしたいしなあ」

霧花はそう言いながら歩みを進め、「ほら、そろそろ村が見えてくるはずどすえ」

突如として、霧花の姿が霧に溶けたように見えなくなる。天海たちは慌てて彼女のいた方向に走り抜け――

「……わあ……！」

風沙が感嘆の声を漏らす。天海も目を見開き、思わず息を呑んだ。

眼下に広がるのは、見渡す限りの豊かな新緑。鮮やかな果実が木々の隙間を彩り、生花の芳香が鼻に抜ける。

「……驚いたな。汚染のない村はこんな……これほどまでに、綺麗なのか」

世界各地で酸性の雨が降るようになってから、地上の美しい緑は致命的に失われていった。作物もビニールハウス等での栽培が大前提となり、この村のような野放しの緑はもはや外ではほとんど見られなくなっているのだ。ましてや幼い頃からA.C.I.D.に保護され、人生の大半をそこで過ごしてきた天海兄妹にとっては、一面の緑など御伽話の世界だったのである。

「ウチも見る度、心を奪われそうになるんよ。つい三十年前までは当たり前のようにあった風景だと思うと、一

層不思議で……天災が、心底憎らしく思えてきますわ」

霧花は軽いジョークのように微笑みながら言い放ったが、きつとそれは誇張でもなく、紛れもない彼女の本心なのだろうと風沙は感じ取った。

「ああ、せっかくやし農家さんのところに寄って、果物でも戴いてきましょか。ナマの果実なんて、今時なかなか食べられへんやろ」

「生？ 果物って、生でも食べられるんですか？」

「外で育てられた作物は、雨で汚染されとる可能性があるやろ。せやから加熱せんと危ないってことになつとるんやけど、ここのは汚染されてへんからね。本来、果物は生で食べるほうが主流やつたくらいなんよ」

ええつ、と女子二人が同時に声を上げる。酸性雨による水質汚染は、魚や農作物は当然のこと、巡り巡ってあらゆる食物に影響を与える。A.C.I.D.の防雨技術を利用したビニールハウス栽培により、現在市場に出回っている食材が汚染されている可能性は限りなく低いものの、それでも生食の文化はめっきり衰退し、表向きに語られることはほぼ無くなっていた。

「ぜひ、お願いしたいです」

普段は控えめな照が、珍しく真っ先に食いついた。風沙も負けじと「あ、あたしも」と乗っかる。

「ふふ、それじゃ行きましょか。外からお客さんが来ることなんて滅多にあらへんから、きつと皆歓迎してくだ

はるよ」

そう言う霧花自身も嬉しそうに微笑み、村へと続く道を下っていく。続く三人の足取りも、どこか先程よりも軽くなっていた。

* * *

「どうぞ、お上がりやす」

道中の農家でリンゴ、モモ、オレンジなどの色とりどりの果実を分けてもらった一行は、宿泊予定地である家屋、京極家——霧花の実家に上がりこんだ。慣れた包丁捌きで霧花は果物を剥き、カットして器に盛り付け、三人の前に置いた。

「……あたし、こんな量の果物食べるの、初めてかも」

「こっちでも安うはないけど、東京ならなおさら高級品やろ。たんと味わったらええよ……あ、でも」

さつそく手を伸ばそうとした風沙だったが、霧花の言葉にぴたりと手を止め、彼女のほうに視線を向けた。

「ここのを食べてしまつたら、もう都会の果物は、とてもやないけど食べられんかもなあ」

フフ、と目を細め、口元に手を当てる霧花。風沙はその僅かに開いた瞳に、あるはずのない敵意のようなものを感じ、ぞくりと背筋が震えた。

「そんなに美味しいのか、これが」

一方、そんな言外の含みなど知ったことではない様子の天海は、赤い皮を残したリングゴの一切れを手に取り、ひよいと口に放り込んだ。

「……………」

シャリッ、と快い音を響かせた後、しばし硬直する天海。一切の瞬きもせず、視線を器に落としたまま動かない。

「天海先輩、どうしたんですか……」訝しんだ風沙が、ハッと鋭く息を吸い、鬼の形相で振り返る。

「まさか、これ、毒——」

「……………」

霧花が目をしばたかせ、間の抜けた声を出す。が、その直後、天海の手が動き——モモの果肉を刺した楊枝を摘み、もごもごと頬張った。

「どうしたんだ、日暮。食べてみる、驚くほどうまいぞ」

「……………」

風沙が呆気にとられている間にも、天海は息つく暇もなくフルーツを口に運び続ける。

「……………」

茹でダコのようにみるみる顔を赤らめる風沙は、唇を震わせながら右手を強く握りしめた。

「心配させないでくださいっ、バカー!!!」

無防備な天海の顔面に、右ストレートがめり込んだ。

「……………」すみませんでした、せつかくご厚意で用意してくださったものに、変な疑いをかけてしまつて……」

疑いはただの勘違いだったと判明し、風沙が今度は真っ青な顔で何度も頭を下げる。

「いやあ、驚きましたわあ。でも、毒っていうのもあながち、間違つてもいないかもしれへんなあ」

「え……………」

戸惑う風沙に、霧花は朗らかな笑顔を見せながら言う。

「昔々のお話に、それはもう美味な甘味を、他人に食べさせたくないあまり『毒』と嘘をついて騙していた、つちゅうお話がありましてなあ。確かに、これだけのモノは迂闊に東京もんには教えたないぞすなあ」

ホホ、と和服の袖を口に当てる霧花を見て、風沙はまただ、と思う。

口調はお淑やかだし、優しい人だ。なのだが、言葉の一端、ふとした拍子の一言に、不意に刺々しさが混ざることがあるように、彼女には感じられた。それが少なからず、霧花を「油断ならない」と表現した神宮寺の言葉に通ずるようにも。

「ほな、昔話ついでに。この村が『雨宿りの村』と呼ばれとるのは何でか、ご存知ですか」

「簡単には、神宮寺さんからお聞きしました。村には酸性の雨が降らない——天魔が現れたことがない、と」

照の答えに、にっこりと笑って頷く霧花。

「その通り。さすが巫女さんどすな」

霧花は湯呑みを一口啜り、絵本を読み聞かせるように語りだした。

「昔々のそのまた昔、まだこの世に『人間』という種が生まれる前の話。太陽の力を司る、天照大御神あまてらすおおみかみと呼ばれ

る神様が、この地を通って天上界——『高天原』たかまがはらに行つ

たとされてます。その伝説から、この村全体が天照様を祀っている……というように、聞いとります」

「よくある伝承ってところだな」

冷めた言葉を返す天海に、「まあ、そう焦らずに」とやんわり釘を刺して、霧花は続けた。

「それで、天照様に縁ゆかりのあるこの地にはもう一つ、言い伝えがあつて……天照様の血を引き、雲を退け太陽を呼び寄せる人間が、天候災害や不作から人々を救った、と。その人間のことを、人々は『天ノ巫女』と呼んだ、とも」

「……！」

神の血を引く者。その言葉に、天海兄妹は大きく目を見開く。

「私が……でもうちは、お父さんもお母さんも普通の人大し、そんな特別な家系ってわけじゃ……」

天海も照の呟きに首肯する。「第一、父も母も東京の人間だし、親戚に関西側の人間がいたという話も聞いたことがない」

「大昔の話やから、天照様の血を僅かでも引く人間は、日本中に散らばっていても可笑しいやろ。『天ノ巫女』は、その血があれば誰でも……つちゆうわけでもなくて、その中でも極稀に現れる存在やったみたいどす。記録——伝承といった方が適切かもしれんけど——に残っている限りでは、ほら、学校の授業で習う「卑弥呼」っておったやろ、邪馬台国の。あれが最古の『天ノ巫女』って言われとるんどすえ」

「えっ！ 卑弥呼って、あの卑弥呼！？」

今度は風沙が体を大きく引いてリアクションする。が、天海と照はピンときていないようで、彼女の反応を不思議そうに眺めていた。

「……有名な人なのか？」

「えっ、ゆ、有名も何も、日本人なら義務教育で一番最初に覚える歴史上の人でしょ、ジョーシキよジョーシキ……」

まくし立てる風沙に、申し訳なきような顔で照が告げた。

「ごめんなさい。私たち、小さいころに被災して施設に引き取られたから、お兄ちゃんも私も、学校にはほとんど行ってなくて」

「……あ」

風沙は慌てて口を噤み、小さく縮こまって顔を俯けた。天海と照の二人は、十年前に起きた世界的な雨害――

すなわち、天魔の襲撃――『第二次世界大天災』^{セカンド・テンベスト}と呼ばれる災害で、互いを除く家族や家を失っていた。天海が七歳、照が四歳の年であり、幼かった兄妹は事態を飲み込む暇さえ与えられず、ACID東京支部にて保護されたのである。

「……ごめん、何も知らずに、酷いことを」

「気にするな。学校に――元の生活に戻らないことを選んだのは、俺たち自身でもあるからな」

天海が過去を懐かしむように、視線を遠くに移して言った。

「ふうん……せつかくやし、天海さん方の話も詳しくお聞きしたいわあ」

「構わないが、まずは天ノ巫女について教えてくれ。俺達はそれが知りたくてここまで来たんだからな」

いけずやわあ、と冗談っぽく笑う霧花。そのまま話は続くものかと思われたが、霧花はおもむろに立ち上がった。

「見てもろたほうが、早いかなあと思うて。着いてきてくれるかいな」

* * *

三人が霧花に連れてこられたのは、天照大御神を祀るという神社であった。大神宮と呼べるほどではないが、村の規模と比較するとかなり立派な造りであり、経年劣化こそあれどよく手入れもされていることが分かる。

「お待ちしておりました、霧花様……それに巫女様」

鳥居を潜った先で、一人の女性が^{つやうや}恭しく礼をして四人を出迎えた。艶やかな黒髪を高い位置で団子にして結

い、^{かんざし}椿の簪を差し、桃色の和服を着た若い女性であった。

「ご紹介します。彼女はシキ、この日向神社の管理と、巫女に関する伝承を代々受け継いできた者です」

霧花の紹介を受け、再び丁寧な腰を折るシキ。「で、こちらが東京からいらつしやった巫女さん、照さんです」

「天海照です。よろしくお願いたします」

頭を下げた照に続き天海たちも名乗ろうとするが、その前に霧花が口を挟んだ。

「それじゃあ、天海さんはウチと一緒に来てくださるかしら」

「……俺は入れないのか？」

てつきり照に着いていくものだと思っていた天海は、驚きと若干不満の混ざった声で返答する。

「そういうわけやないけど、ほら、天海さんはもう一つ……傘を作る、つちゆう目的があるんやろ。巫女のごとは当人とシキに任せて、天海さんはそっちに専念したほうが良いんちやいますかな、と申うて」

そういえば、と頷きかける天海だったが、落ち着かない様子で照のほうをちらちらと振り返り、

「それはそうだが……しかし照を一人にするのも……」
「あら、心配なら風沙さんに付いとつてもらえばええどつしやろ。そのためのお目付け役なんちやいますか」

「うぐつ」
天海は痛いところを突かれたように顔を引きつらせる。彼にとつて照は大天災後に唯一残された肉親であり、彼女を傷付けまいとするあまり傍から見れば過保護になつてしまうことがままあつた。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。私のことは気にせず、行つてきて」

気にするな、と言われて気にしないことができれば苦労しないのだが、と天海は苦い顔をしつつ、渋々頷いた。

「それじゃあ、照のことは頼んだぞ、日暮……」
「あ、あのっ」

風沙にお目付け役の任務を頼んでその場を去ろうとする天海を、風沙が意を決したように呼び止める。

「その、任された仕事を放棄するようで、申し訳ないんですけど……私も、その傘職人さんのところへ、連れていってもらつてもいいですか」

言つた直後、(主に照から)意図しない疑いがかけられているのではないかと感じた風沙は、弁明するように慌てて真意を打ち明ける。

「わ、私も一応、整備士メンテナンスなんです。傘職人むきさんの業には興味ありますし、仕事の参考になるかなー、つて……」

「そういうことですか。ウチは構いませんけど、天海さんは」

霧花と風沙が同時に天海の顔を伺う。

「まあ、断る理由もないだろう。照のことは少し心配だが」

「ご心配されるお気持ちはよく分かります。ですが、私もは太古の時代より巫女の側にお仕えし、巫女と共に在つた一族。巫女様をお守りするのが使命であり、万が一巫女様に何かあれば、私は腹を切る覚悟でございます」

凜としたシキの声には一切の曇りもなく、彼女が誠意、心からそう思つて発言しているのが天海らにもはつきりと伝わつた。それが彼の心を動かしたのか、天海は渋い顔をしながらも「……わかつた」と頷いた。

「何かあつたらすぐ連絡するんだぞ、いいな？」
「分かつてるつて。じゃあ、行ってらっしゃい」

兄の心配性具合に苦笑しつつ、照は小さく手を振って彼らを見送った。

照と別れた天海と凧沙は、神宮寺から紹介された傘職人の元へ向かう……ものだと思っていたのだが、霧花の向かった先はつい数分前に発ったはずの、彼女の実家——京極家であった。

「忘れ物か？」

問いかける天海に、霧花は笑って首を横に振る。

「面白いや言うとりませんどしたな。この村に住む傘職人というのは、うちの実父……当主の、京極霧矢の（きりや）ことなんどす」

「えっ！？ 霧花さんの……お父さん！？」

二人が驚いていると、タイムリングを見計らったかのようには正門が開き、中から一人の老人が姿を現した。

「如何（いか）にも、儂（わし）が京極家の当主。京極霧矢（なり）也」

白髪頭に仙人のような髭を生やした老人は、しかし高齢であることを感じさせる前に、異様なまでの威圧感を天海らに与えた。霧花とはまた違う方向性に古風な、厳格さを醸し出す喋り口。くすんだ黄土色の着物を、見ている方の身が引き締まりそうなるほど美しい姿勢で着こなしていること。何よりその右手に握られた、武士の刀か

と見紛う立派な傘が、彼が紛うことなく由緒正しき傘職人であることを示していた。

「儂の傘が欲しいと申すのは貴殿か」

「……ああ」

老人の鋭い視線を受けた天海は、自ずと一步前に出て名乗った。

「天海快晴。東京支部の調停士だ」

「ふん、東京者（もん）か。気に食わんな」

霧矢は一切の遠慮なく吐き捨て、睨むように天海の目を見据えた。

「貴殿（なにゆえ）に問う。貴殿、何故に傘を執るか」

「……天魔を滅するためだ」

「其（そ）れは然（しか）り」霧矢はやや気を悪くしたように即答する。

「儂（わし）が尋ねるは、何故貴様が天魔を滅さんと欲すか、よ」

「……あのおじいちゃんのお喋り方、なんとかならないの」
凧沙が頭痛を訴えるように額に手を当て、ボソッと呟く。

「家業を継いだうちの家系の者は皆、なぜかああなってしまうんどす。何でなんやろなあ」

霧花のすつとぼけた返答に、「そんなことある？」と至極真つ当なツッコミを入れる凧沙。

「……十年前の大天災で、両親が殺された。妹にも後遺症が遺った。俺は、何も守れなかった」

天海は無意識のうちに、爪が割れんばかりに拳を握りしめていた。

「照を……妹を守るため。もう二度と、目の前で誰かを死なせないため。俺や妹から全てを奪った、天魔どもへの復讐のため。……そのために、俺は調停士をしている」霧矢の眼光にも臆せず、その目を見つめ返す天海。しばらく無言の時間が続いた後、何の前触れもなく霧矢が口を開いた。

「傘は、剣に非ず^{あら}」

その言葉は、それまでの高圧的な物言いとは異なり、どこか寂しさすら感じさせる声色だった。

「幾ら人に仇成す魔といえど、傘は傷をつけるために使うものではない。傘は、雨から人を守るもの。それ以上でもそれ以下でも無い……儂は、傘が戦いの道具となる世を一刻も早く終わらせたい。其の為に、傘を作っている」

そこまで言うと、霧矢は不敵に口の端を持ち上げた。

「ときに、東京の調停士。その想い、口先だけではあるまいな」

「当然、そのつもりだ」

天海の返答に小さく頷くと、顔も視線も動かさず「霧

花」とだけ、自身の娘を呼びつける。霧花のほうも戸惑う様子もなく、「はい」と返事をして一歩前に出る。

「儂の傘を使うに相応しい剣士でなければ、傘を作ってやることは出来ぬ。弱い剣士に傘を作っても、意味が無いらな」

「……なるほど。力試しというわけか」

「話が早くて助かりますわ」

霧矢から傘を受け取った霧花は、着物の裾を持ち上げて括り、庭先の拓けた場所へ移動した。

「そーいや、天海さんは傘は持つとるんどすか？ 先日壊れてしもうたと陸斗さんから聞いたとるんやけど」

壊れた、という霧花の言葉に、霧矢がわずかに眉をひくつかせた。

「ああ、だから傘を――」

「大丈夫です、私が直した傘があるので！ ねっ、天海先輩っ」

げ、と明らかに嫌そうな顔で硬直する天海。彼の背負った傘鞘には、しっかりと一本の傘が刺さっていた。

「ほう、直した、か。貴殿、もしや整備士か」

「は、はい。まだまだひよつ子ですけど」

急に視線を向けられ、風沙はつい身に力が入る。見たいと言ったのは自分なのだが、いざ対峙すると緊張と威圧感で息が詰まる思いだった。

「……どうしても、これじゃなきや駄目か」

珍しく芯のない声で、続けるように凧沙を見る天海。だが凧沙の答えは無慈悲であった。

「はい。だって、先輩もその方が戦いやすいでしょ、手に馴染んでるし」

「……手に馴染んではいるが、目に馴染んでいないんだよ」

彼女には聞こえないような小声で呟くと、天海は特大の躊躇をしつつ、もうどうにでもなれ、とでも言うように目を瞑りながら、その傘を引き抜いた。

「……………あらまあ」

霧花がこれまでで一番驚いたような、惚けたような声を上げ、手を口元へ寄せた。

艶々したメタリックピンクのボディ、光り輝くラメが

眩しい石突、露先に吊り下がるカラフルな球体、雲のよ

うな形に切り取られた布地。いたるところにリボンやレ

ースが取り入れられ、仕上げとばかりに手持ちのハンド

ル部分にはプラスチック製の黒猫が我が物顔でぶら下が

っている。そして遠征出発前に室内で持った時には天海

も気が付いていなかったが、どうも先端部の球体は鈴が入

っているらしく、持ちながら動くときシャラシャラと賑やかな音が鳴る。

「……俺の名誉のために言わせてほしいんだが、元々はこんな傘じゃなかったんだ。もっとシンプルでオーソド

ックスな……」

「そうそう、だからとびつきり可愛くしてあげたんです。我ながら完璧だと思います」

自信に満ちた笑顔で凧沙は胸を張る。

「ええ、えらい可愛らしおすなあ。天海さんにも、よう似合ってます」

霧花はそう言って微笑んだが、明らかに本心ではなくからかうような口ぶりであった。とはいえ、そうした皮肉を察知するのがひどく苦手な天海は、「……………そうか？」と戸惑った様子で傘の表面を撫ぜる。

「兎も角、其処な霧花と打ち合いをして見せよ。貴様が

儂の傘を持つに相応しいか、其れ共その傘が似合いか、

見定めてやろう」

さすがの天海もこの挑戦的な言い分には血を滾らせた

ようで、迎え立つ霧花に切っ先を向け、その先に構える霧矢を睨みつけるように見据えた。

「遠慮はしない。勝たせてもらおう」

「そちらこそ——精々、おきばりやす」

両者が傘を構え、空気が一気に張り詰める。先に仕掛けたのは天海だった。

「うおおおっ！」
気合の雄叫びを上げ、力任せに傘を振り下ろす。幾多

の天魔を一刀両断にしてきた、単純だが強力な一撃だった。だが、垂直に構えられた霧花の傘に、この一撃は受け止められてしまう。

「……ッ!?」

当然、天海とて霧花ほどの強者感つわものを放つ相手に、先の一刃で勝負を決められるとは思っていなかった。むしろ、殺し合いではない試合……「打ち合い」だからこそ、相手の腕の程度を確かめるために、あえて受けさせた節もあった。

彼が衝撃を受けたのは、傘同士がぶつかり合ったとき、霧花の傘の感触だった。

『「和傘」を見るのは、初めてですか?』

「……ああ」

一旦飛び退いて距離をおく二人。天海は改めて相手の傘を観察する。

材質は木か竹か、とにかく木製なのは間違いなかった。スチール製の天海の傘とぶつかったとき、鉄製にはないしなりを見せたのも、鉄より柔らかい素材であることを示していた。

しかし、彼は単なる材質の違いに留まらない違和感を覚えていた。それを確かめようと、今度は相手側から仕掛けてくるのを待つ体勢に入る。

「様子見つちゆうわけですか……:そんなら、遠慮なくいかしていただきます」

霧花が足を踏み込むのを確認し、天海は攻撃を防ぐことに意識を集中させる。現在の距離や相手の背丈等から、傘が振り下ろされるまでの時間を計算し、確実に防御する——いちいち考えてそうしているわけではないが、彼は感覚的にそれを行うことができたうえ、長年の経験から身についた予測能力はほぼ正確であった。今までに聞いては。

「……!」

攻撃は受け止めたものの、それは予測ではなく反射での反応に近かった。事実、傘は辛うじて垂直方向に向けられたというだけで、衝撃を殺し切れなかった天海の腕には僅かな痺れが伝う。

「ほらほら、まだまだ行きますえ」

霧花は続けざまに流れるような連撃を繰り出す。一撃一撃に対処するのがやつとの天海は、徐々に押される一方だった。

「どうしました? 東京の調停士はんの実力は、そんなもんどすかえ」

「チッ……:舐めるなッ!」

霧花の挑発に乗せられた天海は、大きく傘を薙ぎ払う。だが霧花を相手にするには、あまりに大振りで単調な動作だった。軽々と身を翻すと、再び距離を取られる。

「フフ、面白いどすなあ。まるで昔の陸斗さんと打ち合
つてみたいやわ」

お世辞ではなく本心から楽しそうに、霧花が零した。
息の上がつている天海とは対照的に、一切疲れた様子
を見せず、むしろ試合の前よりも活き活きとしているよう
にさえ見える。

「……昔の？」

「ええ、今でこそあんな大人しゅうなりましたけど、昔
の陸斗さんはもっと荒々しうて、血の気が多くて……丁
度、さっきの天海さんみたいだったんだすえ。なんだか
懐かしゅうなりましたわ」

「……全然想像つかないけど」

驚いたような、若干引いたような顔の風沙。彼女だけ
でなく、神宮寺とは付き合いが長いはずの天海も意外そ
うに瞬きをした。

「堪忍やけど、その点ではウチが有利かもしれへんな」
今度はそちらからどうぞ、と霧花は手首をくい、と動
かし、天海を誘い込む。天海のほうも、先手を取られて
は防戦一方になるのが目に見えていたため、甘んじてこ
の誘いに乗る。

右足を大きく踏み込み、一気に懐へ飛び込む。相手の
急所に近い位置で、相手が反応するより速く、一閃を差
し込む。対天魔戦において、天海が最も得意とする戦法
だった。

「——やっぱり、そう来るんやな」

「な……ッ!？」

霧花はニヤリと微笑んで、上半身を僅かに反らす。ま
るで彼の攻撃手段や範囲をまるつきり先読みしていたか
のように、最小限の動きで躲し——

「東京の人間は、後先を考えなさすぎるんよ」

その一瞬で、天海はようやく理解した。先ほどの挑発
は情けなどではなく、さながら蜘蛛の巣のように、獲物
を誘い込み——確実に仕留める罠だったのだ、と。彼女
の糸にまんまと引っ掛かった彼は、もはや進むことも退
くこともできず、ただ迫る毒牙に切り裂かれるのを待つ
しかなかったのだ。

「——其処迄」
そこまで

傘の先が天海の喉元に触れたところで、老人の音が空
間を割くように響く。霧花が傘を下ろしたのを確認した
天海は、どつと緊張が解けたのかその場に両膝をついた。
「……クソッ」

霧花が調停士の中でも屈指の腕利きであることは、打
ち合いの様子を見れば誰の目にも明らかであった。だが、
天海も並大抵の覚悟や実力で調停士をしているわけでは
ない。ほんの一撃のかすり傷すら与えられずに打ち止め
を食らうほど屈辱的な仕打ちもなかった。

「お疲れさんでした、天海さん」

和傘を鞘に納めた霧花が、裾を元に戻して言う。つい先ほどまで激しい斬り合いをしていたとは思えないほど、何事もなかったかのような涼しげな顔を崩さない。

「天海、と言ったか」

一言も発することなく戦いを見守っていた霧矢が、初めて天海の名を呼んだ。

「今の貴様に、儂の傘を使わせることは出来ぬ」

「……ッ！」

冷酷な宣告に、天海の表情が陰る。彼を心配そうに見つめていた風沙もまた、霧矢に向かって叫ぶように訴えた。

「っ、確かに先輩は、霧花さんには勝てませんでしたけど……でも、先輩にはどうしても、霧矢さんの傘が必要なんです！ お願いします、どうか……！」

「案ずるな。未だ話は終わつたらん」

えっ、と二人が同時に顔を上げ、霧矢の次の言葉を待った。

「儂は、今の貴様には、と言った。貴様がどの程度、村に居座るのか知らんが……もし貴様が、滞在期間中に再び霧花と打ち合いをし、勝つことができれば……貴様の傘を作ると約束しよう」

「……本当か」

瞳孔を開いて、天海は継るように呟く。

「無論。職人に二言は無い」

「ウチも、出来る限りは協力しますえ」

柔和な笑みを浮かべた霧花が、しやがみ込んだままの天海に手を差し伸べる。

「自分が負けるために手伝うつちゅうのも、ケツタイな話やけどな」手を取った天海を引つ張り上げて、霧花はクスリと笑う。「あんさん見とつたら、陸斗さんのこと思いついてしもうてな……放つておけんのよ、あんさんもあの人も」

「………悔しいが、完敗だった」奥歯を噛みしめる天海。「だから、頼みがある。俺に稽古をつけてくれないか」霧花の目をまっすぐ見据えて言うと、天海は頭を下げた。

「頼む。俺は、照のために……強くならなければ、いけないんだ」

「……照さんのために、どすか」

霧花は呆れたように笑う。「本当、まるで親子みたいどすなあ。堪忍やわ」

それから霧花は天海に背中を向けると、すたすたと歩き出す。

「ッ、待ってくれー」

「言つときますけど、ウチの修行は厳しいどすえ」

彼女の背中に伸ばしかけた天海の手が、ぴたりと止まる。

「村への滞在は、確か今日を含めて三日でしたろ」

「……ああ。明後日の朝には、ここを発つ予定だ」

梅雨晴といえど、天魔が現れないという確証もない以上、あまり東京支部の活動に穴を空けるわけにはいかない。加えて照がない状況では、万一のときに巫女の方を使うことができない。天海たちが抜けた程度で戦力不足に陥るほどヤワな部隊ではないが、不安要素があるのも確かだった。

「では、明日の夜、再度打ち合いを行う。貴様が打ち勝てば、翌朝の出発には間に合わせてやる」

「ちよ、ちよっと本気！？ たった一日で、霧花さんに勝つていうの！？」

風沙が横やりを入れるが、当の本人はすんなりとこの条件を呑む。

「分かった。再戦の機会をくれたこと、感謝する」

「フフ、そう来ませんと。せやったら、一秒も惜しんでられへんなあ」

「ああ。よろしく頼む」

霧花と天海は視線を合わせると、再び傘を取り出す。

霧矢は何も言わず屋敷の奥へと戻っていき、残された風沙は一人オロオロと周囲を見渡す。

「えっと、あたしはどうしたら……」

「先に帰って、休んでいて構わない。好きにしろ」

「す、好きにしろって言われても……」

尚のことどうすればいいか分からず困惑する風沙だったが、天海の視界にはすでに彼女は入っていないようで、霧花のほうに向き直ったきり振り返る様子もなかった。

「……あーもう！ ホント、新人の扱いがヒドいんだから！」

ひとまずその場を後にし、霧花の部屋へと戻ってきた風沙。しかし、ただ休憩する気にもなれず、ぼうつと天井を見つめる。

「……カイ先輩も照も、頑張ってるのに。あたしは、何もできないの？」

ちやぶ台の上には、すっかり空になった器がぼつんと置かれている。村の外では失われてしまった、毒物かと疑うほど甘美な果実が、山ほど入っていた器だ。

「……照のために、か」

天海が調停士として、天魔と戦う理由。彼自身から何度も発されたその言葉が、今になって彼女の脳裏に渦巻いていた。

『……ま、この日本で進んで兵士になろうとする奴なんて、理由アリじゃないほうが少ないからな』

いつだったか、調停士部の一人である伊勢島がそう言っていたのを思い出す。おそらくは、風沙にもその理由があると考えての発言だったのだろう。

「……あたし、ここに居て、いいのかな」

ぼんやりとした、しかし確かに存在する不安が、黒い

靄のように風沙の思考を蝕んでいた。

* * *

「……さて、ここまで来れば大丈夫でしょう」

一方、天海たちと別れ、神社の管理人シキと共に社の中を進む照。一般の人々がお詣りをする「表社」を抜け、

隠れ通路を通り「裏社」……洞窟のような遺跡へと辿り

着いたところで、シキが後ろを振り返る。

「照さん。一旦止まってください」

シキの指示通り、照はその場に立ち止まる。すると、

シキは照のさらに後方へ向かい、よく通る声を響かせた。

「そこに居るのは分かっています。姿を現しなさい」

えっ、と照は驚いて耳を澄ませるが、何の足音も気配もしない。しかしシキは毅然とした態度を変えず、虚空に向かつて告げる。

「……だんまりですか。仕方ありません」

すると、シキは人差し指と中指を付けた右手を虚空へ突き出す。直後、ピチュン、という音と共に、彼女の指先から熱光線が放たれた。

「ギッ……!？」

光線は何かに命中したようで、壁の石に混じって、ど

す黒い塊のようなものが落下する。塊は一瞬、双眼を光らせたように見えたが、その直後に靄のようになって消えてしまう。

「今のは……天魔ですか？」

照は不安げにシキを見るが、シキは横に首を振る。

「いえ、私にも分かりませんが……少なくとも、天魔ではない別の怪異です」

別の怪異。その言葉に、照は怯えたような視線を送る。

「ともかく、気が付けてよかった。そうでないと——」

その瞬間、なんの前触れもなく洞窟の中に突風が吹き、照は慌てて腕で顔を覆う。だが、シキは微動だにしない——というより、どうもシキを中心として、風が巻き起こっているようだった。

「——私のこの姿が、どこの誰かも分からぬ奴に、見られてしまうかもしれないからな」

突風が吹き止むと、そこには先程までの少女の姿はなく——代わりに、長い桃色の髪を残風に靡かせた、人間離れたオーラを放つ女性が、微笑みながら佇んでいた。

《続く》